

「成熟社会」期における〈農業本位の思想〉の性格

—農本主義との照応関係に着目して—

大石 和男

農にまつわる思想には、農（林水産）業とその産物という産業的側面に立脚しものに加え、農（山漁）村という空間から派生する様々な活動形態と、そこからもたらされる効用に着目したのも見受けられる。本研究ではそれらの中から、農的な価値や効能を社会および自己の変革に活かそうとする思想を取り上げ、これを〈農業本位の思想〉と名付ける。そして日本の高度経済成長が一段落した 1970 年代以降（＝「成熟社会」期）に多数登場した、プラグマティックな指向性を強くもつこれらの思想の特質について、戦前期の農本主義との関係性を踏まえつつ、実証的および比較思想的に解明を行った。その際、思想をめぐる理念と実践の差異に着目し、これを「理念距離」と名付けて概念化すると共に、この概念によって思想の特質ならびに動的側面の把握を行うことを、研究の基本的な視座とした。

論文は、序章と終章および 7 つの章から構成されている。

まず序章では、〈農業本位の思想〉の定義、および「成熟社会」期という時代的背景について整理がなされた後、戦前期の農本主義を今日の思想と比較する理由を述べる。そして方法論として、自己規律という観点を交えつつ、理念と実践の間に見られる差異について、「理念距離」という概念を設定する。

1 章では、農本主義の先行研究に対する整理および批判的検討として、定義検討型研究・思想領域探索型研究・視点設定型研究の 3 種に先行研究を分類しつつ、それぞれの学術的意義と限界について述べている。そして、戦後の農本主義に対する理論的位置づけの探求が不十分となっている反面、戦前と戦後を繋げて捉える把握法に対する緩やかな容認もみられることを明らかにしている。

続く 2 章では、1970 年代以降の〈農業本位の思想〉に、どのような事例が存在するかについて検討した。まず戦後農本主義については、単発的な試論に留まるものが多く、発展性を認めることができなかつたのに対し、具体的な方向性を掲げ、実践を重視する思想には、成果を伴った事例が多く認められることも明らかとなった。次にそれらに対して、有機農業・「自給」・「百姓」・農的コミュン・環境保全型農業（減農薬運動）・農村女性ネットワーク、という鍵概念を与え、それぞれの概要について整理を行った。

3 章以下では、個別事例を掘り下げて分析を行った。3 章で取り上げたのは、思想

家である藤本敏夫の「自給」構想である。彼は有機農産物の流通業に携わった後、1980年代に「自給」思想に基づく農園を設立し、そこでの活動を起点とする形で、さまざまな農的思想と新しい生活様式を提起した。そして分析の結果からは、「禁欲」から「愉しみ」へと転換の進む時代状況の中で、彼の唱えた「緩さ」を基調とする思想の中に、「理念距離」に対する肯定的な認識の見られることが明らかとなった。

続く4章では、同じく「自給」に関係する事例として、食の安全性の問題をきっかけに誕生した、「たまごの会」に焦点を当てている。そしてこの会の「自給」を旨とした理念の形成と、その後の活動展開について、「理念距離」の観点から分析を行った。その結果、会が発展する過程において各種の実践が提起された反面、それと理念との差異も徐々に表面化していき、これに対する会員相互の認識のズレが許容範囲を超えて蓄積されていったことで、組織の分裂や理念の再解釈、新たな実践の創出など、思想の動的側面を次々に引き起こしていったことが明らかとなった。

5章および6章では、農村女性ネットワークというキャッチフレーズに参集した女性達の活動を、思想という観点から捉えることを試みた。事例は、90年代に登場し、農村女性の間でネットワークブームをもたらした「田舎のヒロイン」である。このネットワークは、当初はエンパワーメントを通じた自己変革を目指していたものの、後にはジェンダー色を薄め、食と農を通じた社会変革に舵を切るようになる。その過程において、参加女性たちの視点には、広域ネットワークから地元へと回帰していく現象が見られ、変革活動の場が地方および個人活動へと移っていった実態も明らかとなった。

7章では「百姓」思想の基底条件を探るために、長野県の果樹地帯における若手就農者を取り上げ、彼ら／彼女らの就農・営農意識とその変化に焦点を当てた。その結果、この地域には「百姓」に特別な意味を与え、高い水準の技術習得を目指す中で、この理念的人格に近づいていこうとする思想が根づいており、後継者獲得と産地競争力の維持に効果をもたらしていることが明らかとなった。

以上の分析を踏まえて終章では、「理念距離」概念が思想の動的性格を把握するのに有効であること、「成熟社会」期の思想には鍵概念を相互共有する傾向が強いこと、およびこの時期は「禁欲」から「愉しき」や「緩さ」へと自己規律の型が変化していったこと、を主な内容とする結論を述べた。